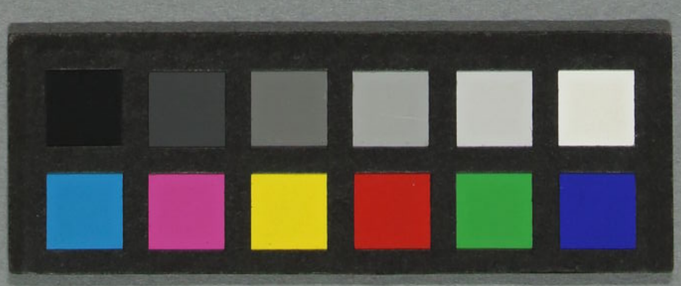
5678
5



門 へ
號 5678
卷

增續丛之井

副錄

發句切字 俳諧止式
句數去嫌 新撰句态
同字別吟 假名遣

四季詞寄
雜之詞

讀書樂

序

書肆昌運堂主人山の井社小冊を
懐ろ来り校合を乞ひ仍て書林
久しく我俳書を梓行せん事を
切に請ふ故に文字の違ひを訂して校
正を加へ雲を煩はすに似たれども
雲を煩はさゞるに似たり 四時

うつり物と忠候を祈らんと欲
ありやけども
当寺神事法則佛の正法第一
念数九拝まつり物
新り出雲の修多羅を写し
井び生盛五供養
唯於一乗の教意おのづから
具和歌ともく風宝はう色乃心味も

なるのうた乳俗名の
追善ゆゑ山書よかれ
万寿の道へ於ゐすこ
法再考を書写
文化丙子年長月

三井秉山

發句切字

我住家のかる
志つむ小　えびかるかもる以里うる
らんむ一字まる
といつて　めりやでし　説左未来切字
くるまい切字
なるいるしるしさぶるかし
かやのうらよか　やいこのよ
かうらよか
つゐづれいつこいつでいうくる仙の
さそよ　鬼おりんぬいわ
よのぬいわ

太大畧此まで考へしほかよ

下知の切 ん の切 二字切 三字切 をはへし

大はら〳〵 三名切三段切とも 玄妙切 七ッのや

口あいのや ちや 按や 超や 中のや そこのや こしのや 是おい所作を作し

和ん の分別を事と

三のし 現在 白〳〵 雪〳〵 純〳〵

未来 〳〵 あし〳〵 とう〳〵ます

此二ッハ切字なる

ま去 おし〳〵 なるめし

此分切字なるべし

○ふの処 おりん処

よきぬる ちぐぬる とひぬる 此分平切字と

さらずぬ ちらずぬ とはずぬ 此分ふのぬ切字なるべし

太ぬの字の下にる の字付き是くるの字付

らるしてぞ通ふをふのぬと云切字

なるべし又へけせてへめれのかるを

うつる如いまさるく切字なり

えぺ如もぴ如もで如さけ如きえ如よめ如

させ如先学し

俳諧之式

○百韻

面八句 七句メ月ノ定座

二ノ面十四句 十三句メ月ノ定座

裏十四句 九句メヨリ月カ秋カ十三句メ花定座

二ノ裏 初裏ニ同

三ノ面十四句 二ノ面ニ同

名残面十四句 三ノ面ニ同

○七十二候 百韻ノ三ノ面裏一折殺タルヘ

○四十四 従序ニ八世吉ト書 百韻ノ二ノ面裏三ノ面裏ト二折殺タルヘ

○源氏行

面十八句 五句メ月ノ定座

二面十二句 十句メ月ノ定座

三ノ裏十四句 二ノ裏ニ同

裏八句 七句メ花定座

裏十二句 七句メヨリ月カ秋カ十一句メ花定座

二裏十二句 初裏ニ同

余波十二匁 二面ニ同 裏六匁 五匁メ表 定座

○歌仙 源氏ノ二ノ面裏一折 後タルヘシ

○米字 源氏二百韻ノ二ノ面裏一折ノ下ノ八十八吟成

○五十韻 百韻ノ初折二折十リ

○首尾 面八匁裏八匁 ○面合 面八匁斗

○句数 并去嫌

素秋 日本五匁五 三匁ヨリ五匁マテ 二匁ヨリ五匁マテ 夏冬 日本五匁五 一匁ヨリ二匁マテ 三匁ヨリ五匁マテ

神祇 三匁レンギ 一匁ヨリ五匁マテ 三匁ヨリ五匁マテ 釈教 三匁シャクケウ 非祇トハオ

述懐 三匁ジュツクワイ 雑 一匁ヨリ五匁マテ 三匁ヨリ五匁マテ 山野 三匁 一匁ヨリ五匁マテ

恋 三匁 二匁ヨリ五匁マテ 水辺 三匁 山野ハオ

人倫 二匁 二匁ヨリ五匁マテ

居所 三匁 一匁ヨリ五匁マテ 生類 三匁 一匁ヨリ五匁マテ

旅 三匁 三匁ヨリ五匁マテ 植物 二匁 一匁ヨリ五匁マテ

生類 二匁 鳥ト虫虫ト獣魚ト各ニ匁ヨリ五匁マテ

植物 木よ草ヶ竹なるくうく
多なる物之竹ヶ竹ヶ比勾之

名所 二勾

歌分 三勾

降物 二勾

雪物 二勾

○勾去る事

人倫人名所国名 玉名

衣類 二勾

国名 一勾

毋分 久は分ト
勿は分ト
久は分ト勿は分ト雖去我

天象 一勾

二字なかる火餅風辨勿と名と勢る時分日月
星と勢る类ゐ本と竹と勢る植物 虫类
數と勢る类生數 女のゐ二勾去ちく
同字生數 植物時分夜分衣類速疾
居訓旅辨神祇教 亦常山數
水魚 女のゐ二勾去ゐ
音訓ゐ二勾去ゐ
辨のゐ二勾去ゐ
去声を以て知る

月 松 竹 田 芙 渡 枕 衣 舟 煙 同 季
（此ふたつは五句ともに四季あるゆゑ一日を五句ともに仮月次の日にきまれり）

同 増補 彩 撰

又 母 男 女（人倫の名例ゝ）三 誰 身 独 嫉（此ふたつは人倫のうち）
（ゝ人倫と定て其合をとるべし）僧 寺（此ふたつは人倫にあれど雑とはいへども其合をとるべし）親 王
皇 女 天 童 天 女 御 門 帝 仙 洞 影 院 鬼
佛（此十四ツは右式よろしの設あれど人倫よりは尻かよろしからず）若 菜 郭 公

松 虫 水 仙 名 霧 三日月 尾上（此ふたつは百句ごとに変じて二つあるべし）
雪 雨（此ふたつは四つよりおよそ一つ入るべし）魚 虫 車 飯 餅 茶
雨（此ふたつは京より日目のうるゐ二年に二つあるべし）松 下 の 日
但 ゝ 一 年 の 雨 後 よろし
月 よ 更 科 花 よ 吾 妻（此ふたつは連歌の俗語ゆゑ俳諧より用ゐるべし）猿 よ
秩 父 瓜 木 よ 妻 恋 よ 木 葉 よ さ ら 野 分
の 菖 よ 水 鶏 山 伏 よ 山 寺 夜 寒（此七ふたつは真式の嫌ひおゐて今式よりは除けり）
雨 仏 遠 火 滝 窟 眠 の 字 記 の 字 垣 炬（此八ふたつは真式よろし）

夜ふと詠まとも夜分と
写てき念とろ〳〵ふ 冠よ烏帽子 袍よ木綿 夕之
小雪 面よ笠 着よ狩 此五尺を古式よつけ夕をきる八尺と
今のちひ 弥生 師走 此二尺を古今ともに美名の月分〳〵とそれ
ふ〳〵 と燥よをし古今の通式あり
山峯風巒 此にいたる九例く

○同字別吟

春日よ素も日も 篇 紫 勅よ勅産 我邦
勅鮮 勅令よ令 弥陀 弥勒よ弥代 代よ代物

関白よ関 中風よ中中 南無よ無 氷撰よ
撰 行よ行 軒よ花形 雑よ雑 波よ波 経よ重
天智天皇よ天目 玉水よ水 地蔵よ蔵 金よ
子 孔雀よ雀 盂蘭盆よ蘭 三日月よ日 蜘よ
日も暮も 岩よ沢 今朝よ今 皆よ是年 是日
も今の字ふ〳〵 我日よ日 昨之日よ不燥月
さみぶしきち〳〵ぎ 弥生のたひ 戸よ上戸

下戸 天下を下戸(ゲコ)と云 夕手(ユウテ)
王母(ワウボ)よ母(ハヽ)百合(ユリ)花よ百ノ字出(イデ)て量(ハカリ)ごと大
概(ガイ)をもて准(ナゾ)へ吟味をへ
假名遣大概
一中乃えを書事 中をゆとよむ中のえをゆこ
越(こえ) 消(きえ) 冴(こゆる) 消(きゆる)
受(おわえ) 炊(たく) 肥(こえ) 金(かね)

一ゐと枝とよ事をかなひ其字のこゝろをもねてよみくるいこと
志(こゝろざし)ゐ 塩(しほ)いろり庵(アン)於(ヲ)能(ノ)れ 衰(カン)うる泉(セン)涓(セン)
一堀乃と書事 小乃字つまり詰のこと
とふね 小舟 とま 小艫 をぶね 小川 とぐち山 小谷 とる巻(まき) 巻
とぐち山 小塩山 とぐち小梯 との小野 とこそで袖 忘袖
とぐるま 小車
一物乃脇付字いづれも詰のと成へ

玉乃を　琴柱を　袋を　奏のへを
一をとゝめなどいづまも詰乃をこ
をゝ吸ふ　をゝ吸ふをとよまる　こゝろもれたこ
物乃きいづまも詰のをこ
とよづま　緒のとと　風とと　とよ川　とよ川
まり丸皆とと　いづまも奥れそい者べうま
一とのまとのづうとのづうちゝく　こゝろもれくの
おそいまくうこ

一をこゝゝ　六女良花とうきり詰のをこ
一をんなといふ詰のをれとことゝ奥れこ
一奥乃れ書津　大の字いづまもれくのれ奴へし
れおそう大空おほろ　大方　れおそう大空　れおそう大系
れかえ山大江山　おほろ大海　おほ井川　大井川　ゆきいづまもれ
一尾の字いづまも奥れるへし　くのおるへし
れの〳〵尾上　山もり　れれ乃もうお

一ㇵの字いづまも奥乃れるゝ
おります　おりめ　おりんとき　こもたゝ
一端のへを書筆　ふひへ　ふひへ　いづまも端のへ
おのふひへ　忍　ねぐひへ　乳　むくひへ　酬　いふひへ　言
はぐひへ　蚊　はふひへ　迷　たぐひへ　抜　わふひへ　洗
そふひへ　拂　たぐひへ　遠　なふひへ　港　ちふひへ　契
ちふひへ　遠　たふひへ　低　ものひへ　伴　おもふひへ　荷

いそふひへ　祝　そふひへ　唱　ふひへ　添　さふひへ　倣
おふひへ　相　くふひへ　叶　ふひへ　狂　ふひへ　延
ふそふひへ　赦　ひろふひへ　拾　ろふひへ　浄　むふひへ　向
きのひへ　約　えふひへ　酔　ぬぐひへ　味　はふひへ　侍
そふひへ　這　もぐひへ　随　ふひへ　映　ふふひへ　占
すふひへ　森　はろふひへ　絡　きふひへ　嫌　やふひへ　峯
右そのほか乃ひと塗ものゝ

ゐきまゐ　奔　うまゐ　吏　うまゐ　善　きまゐ　吏　うまゐ　勉
うまゐ　倣　事まゐ　踏　おまゐ　よ　そのゐ　調
さうふゐ　栄　う幽　植　をぬ　表　をふゐ　加
此外あまた有べしひふゐもよかよふ書れ故よ端のゐ云
まゐ此ごとき事ても申ゐえや眞のゐやをといきまぎ
又ゐゐ　よかよも　ともも書　白此書　かゐて　諸兼
字とハ端のゐまゐとまるべし

一奥ゐゐと下に書る事

ゐゐ　声　すゐ　未　ふゐ　熟　いゐ　家
うゐゐん右悪　まゐん　慮うひ事ゐ右をゐさひ事ゐ右をゐ
わたくの忌かく事あまた有ずきりや
一端乃いを下に書事　此数端のいと下にかくし
おいのゆさめひひらいたいをいくさいく
一冊ゐまを書事　なまにかよ区一ゐよよむい申れる吹
へたとへ九を井九るまとも候書

はのまゝを引て中にゐをかく
くるゐ　たゆゐ　くるゐ　まゐらせ
いゐかゝり　はゐる　まとゐ　まちゐて　そゐる
よゐ　きゐる　いる井　ふゐゆく　此類なるへし
一 うの字下に書事 下にひきのをまさにみゆれはいるいう此字なり
そう僧　あうし法師　せうかう焼香　ねうばう女房
まうだう同道　せうく小之　ぶうたう堂塔　こうせう興隆
まうけ儲　まうし料帛

右なとむ字の下とうと読は大概うの字成へし
訓にて読時はうとよむ字はふの字をとうと読ある
へし はしめて読字はうの字のこゝろなるへし
一 むの字をうの字に読事 口をつめて読字はうの字乃よく成へし
むもれ木　むもれはて　むそむの荻　むへ山風
むめ　むま　うこんのむますぐ
一 きぬる文字はにとせ之　蘭(ラン)をらに　難波(ナンハ)をなには

丹波をたよる　芝蘭を志をよるのたぐひ

一ぱんだうへ　まうしうんと云ふ　一柚たまるいたらずと云ふ

右もかかしこまきるのきる　俚名れもり字なりろよ

もつまきをうまい中乃ね奥のひやをどれもひ乃外

うのまる事もなるありとくく考へ下唯

俚名遺ち挙一陽已而余い準えもるくし

増續山井四季之詞上

春　青陽　青帝　陽春　蒼天　東君　詔光

正月　むつきもの月（爾雅）上陽　孟春　太蔟　陬月（周礼）夏正　太帝月　孔云正日い靭昧ゆきむつぶねよむつき日ともいふそれを畧しむ日といひて立春の後十五日氷の節の初候より斗柄寅のうへよさせり生ねよりの日を云ふ寅ハ敬の世の正日とて夏正といひて十二律の太蔟時ハ此月に当ると云　○元日をさだめ　この日乃

えーめ　わうみのえー　わうみのえー　初ー
彩ーさま　上日　年数　整頓　改旦　歳旦　年の
そーめ　めのそーめ月のそーめ月の朔日のそーめ
う家の朔月の朔日のあれいこのあーとといふなり

○四方拝（シハウハイ）　年をとるの付ゝ俗ゝ
多て年災を払ひ宝祚（ホウソ）を祈るの公事
根源なり次第に毎年の三合り
南きの年を命年をとり七日迄て祭るもの
いまだ多の世俗年佛とて
○歯固（ハカタメ）　供餅　俗ゝ
歯ぐきもろくなる　称ゝ
さめといひてそちぬてそれ
い歳とんて命とう故とよ

ひくさもろくなる　古生家の称餅をいふて堅めか
納をいふ枕草紙ゆうくその事をいふとてみよひのみくさ
ぎふーてはひさぐるといふ一名をおやこ草ともいふ
あうりのいさぎをおやこ草ともいふ一名をおやこ集
みくさをめ花をよ大根をかちうちもるまにはなよそう
そなる一名をかく草ともいふ

○薬玉（クスリダマ）　ふくろ
屠蘇をさらひてのむて年をとる
こいねがふの事を女ていふ

○御屠蘇（ミトソ）　白散（ビヤクサン）　度嶂（トシヤウ）散　天皇
比俗作るごとく年中行事の条に詳なり

○椒柏酒（セウハクシユ）　事文
一献よ屠蘇二献よ白散三献よ度嶂散之献よ屠蘇とふ

○椒酒（セウシユ）　事文

○椒觴（セウシヤウ）　書言　これをえ用るよ

一事文雄家よりあり ○朝賀 勅旨 群臣 天子を奉賀する事也 ○元日節會 七曜御暦 日曜 水木金土 日曜 水木 ○元日節會 七曜御暦 日曜 水木金土 日曜 水木

孔子をまつりたまふ事也 ○院參 一日淳和院の社に詣でたまふ事 ○院の御乳母 拾芥抄に在 ○祇園社 天子祇園の社を松の木にて造りかざりたまふ事也 ○徳のうと 俚 ○元方棚 俚 ○畏沙門 ○門の神棚 俚 ○若ひ夷 俚 ○門松 俚

ゐ年どと世諺に云ゐ竹に万世を契ろ松のふれい年始の祝ひ事なるよし一条禅閤の随筆に作くさせ

○かさうふえ 俚 かさうふ 簠簋 ふうく色なえと作るこれといへども門うかぎりなくていまるまでとぞ

○かき鯛 俚 ○伊勢海老 井華水(セイクハスイ)に水桶 俚 をてくよくもみて立春の日壬水(ミヅノエ)司内裏(カドリ)をまいり邪鬼(ジャキ)を除くといふ事中の祝ひ事中行事に合よろこぶ事をつゝ井ひくともよくをのうめよくめでたき水と云ふ又世諺に云ふ水を呑ふ作ふ事と作り

○若水 俚 井ひく

○松かぶく 俚 元日より大祝ひとゝひ七日まで雑煮餅を

餅(モチ) 俚 二ケ日につきたる餅を雑煮(ゾウニ)に用ふる

○雑煮(ゾウニ) 俚 ものゝ名にはむすびこぶはいはゞ屋(ヤ)ゐはひとゝ云ふにあのものゝ名にかざ箸 俚 ○蓬莱(ホウライ)菓 ○若(ワカ)

○たゝこ 俚 生海苔(ウミノリ)を製(コシラ)へ乾(ホ)したる物(モノ)○をしお 土佐にて記(シル)す元日に用(モチ)ゐる有(アル)
紅汁(ベニシル)にも元日押鮎(オシアユ)一杯(イッパイ)いてうあへ○年男 俚○庭
年魚(アユ)とそ(ソ)れをもとめ用(モチ)ゐるをいふ○ふくわら
かまぐち(口)○ふくわら 俚 年始(ネンシ)のお玉(タマ)
○たま 俚 年始(ネンシ)のお玉(タマ)
玉(タマ)は万祭(マツリ)に玉(タマ)まつりするとこゝろ(心)是(コレ)(袖中抄)これ菟毒(クサブチ)の土(ツチ)
治(ヂ)する嵐(アラシ)太(ダ)り眠(ネブ)の人(ヒト)又(マタ)をあそ(ソ)ら子(コ)といふ(袖中抄)(世諺問答)
○ほく 俚 さゝれ石(イシ)ちやくもく(袖中抄)は(ハ)やとね(ネ)ぎ(ギ)は胡冦(コキ)の子(コ)は
ねをとらんとするのかさちよし(袖中抄)こゝろ(心)は牧(マキ)よりもれざる
ひといふ(袖中抄)秋(アキ)乃(ノ)蛤(ハマグリ)蚫(アワビ)牧(マキ)をくよおくそ放(ハナ)よ(世諺問答)○破

魔弓(ユミ) 俚○破魔矢(ハマヤ)
いとむまくらうむらうの
弓(ユミ)の弥(イヤ)びうや○
○湯屋(ユヤ)ぬ(ヌ)め(メ)○弓(ユミ)を
○きそ(ソ)ぬ(ヌ)め(メ)は(ハ)ま(マ)ぬきそもるいそひく三ケ(ノ)ほのこゝろ(心)吉(キチ)は
ともかくそ(ソ)てのそ(ソ)ぬ(ヌ)め(メ)を指(サ)ひてもろこ(コ)ある説(セツ)よい議(ギ)姫(キ)とて舟
仕(ツカ)るまをもいふ○こゝろ(心)を(ヲ)ちく連平(レンペイ)の 俚作○叔(レキ)
氣(キ)○初鳥(ハツトリ) えほの訛乃(ノ)あ(ア)ふ(フ)○初夢(ハツユメ) 主夫(シュフ)の訛乃(ノ)美(ビ)こ(コ)○去(コ)
年(ゾ)今年(コトシ)するとしそ(ソ)もき年(トシ)ひの(ノ)ま 俚○暦(コヨミ)ひ(ヒ)き○筆

試る 手そめ 俗吉出口 試毫は

○千壽万歳 万年ともひとつゝ花を餘情ニアリ ○松をやし 俗 ○くゝひそめは 是もさゝいらくにて春おく ○多返は ○松さゞり 俗えびなどあるを世俗よいひなへをう

○い祢つむ 俗 ○いくもおくる は正月の庭起をいふ ○せち根喜 ○ゑひす 祝 ○寿福 ○桃符 桃板桃梗仙木 ともいふ

神茶鬱壘 生いそうこうけるゝ〳〵よ桃のまれめざに神茶鬱壘の二神のうくちを注ゐきてえをよ門よそく悪をふをくわざし佐ゝ生を桃弟とも桃枝仙まるともいふ文 ○畫鶏貼戸ニ 葦索 生もかゝ国よゐっ

あら藷を門戸のうくなをさゝ生うくゝ生ゝをきめい百足をそうこ由来は記よありえねり事ゝ

○如願 そうこうにある高人なりきねり生ハ如願は高人なりきねり生ハ如願をうこうにえをよめ彩こ

歪くおさ出ゝとて高人おひうちけ生い叢壊の中おけ入てそはえこをめぬを放よは人えねり事ゝ

けて令め彩とつよ事ゝ ○荒灰 生をのはあしの茶乃灰を俳の場よこてく事ゝ ○春盤生菜 もろこしの李陽とつよ人大根荊をけい茶の乳野付生灰をたとこ事文 ○春燕

なとを菜盤とて生茶乃日おひをくれりえうう事文 ○春燕 これをもろこれ燕をたゝ

いとりて生茶の日いそくとく菜付記 ○縁遠 いろ〳〵てもこれをもろこれ燕をたゝ

○初子　日のあるひく　小松ひく　子日の雲　そめ殿の
るに私ざる事とて萩（ハギ）とて子日の松にひこがひする座をも記そむる事と神事おはり　○若
菜　初ごろもヒメさざめごろ（ごろもこごろ）すてゝ　仏の前　若菜（ワカナ）つむ　磯若（イソワカ）
菜（ナ）　手折（タヲ）る若菜（ワカナ）　若菜（ワカナ）摘（ツム）　若菜（ワカナ）　若菜（ワカナ）（俗玉集）　若菜（ワカナ）つむ（俗玉集）
これを事とはむかしいま若菜を上のをはに門松察毎日摘
日ようう楪（ユヅリハ）申して　おろしと十二種供（ソナ）る事　七
おりし由公事相原よりも菖蒲（アヤメ）おひもぎ　六日晴より七日さ
いと室家七日に祝（ハフ）りそこなうきをいひ　六日晴より七日さ
やもとてわるまを　唐（メウト）ものうとは本乃うとよ事を
うそうや
しり　○初寅（ハツトラ）　子に（俗）　○小ごはろし（俗）上の室乃祝（クラヒ）にまいる事こゝもまた

りとうふのわさまいせごよ火おこを
煮事をふごおろしといふり二夜の宴（ヨメノテラテングサカモリ）
○聟（ムコ）宿寺天狗宴（俗二日弦指）行之　○卯杖（ウヅヱ）　卯槌（ウヅチ）　杖（ヅヱ）
をくはまともを　尽すてよきうて二本ゆひておりやけたて
まうをはねとりより公事相原よりも卯つちとおり卯
杖と同し事ゝ年中の名尾（アクキ）を追ふ糸ふより門書よりもおるねと
三夜泊る泊ゝいよの世よかゝ残（ノコ）るおるこれ
いつ人おろうの白くけつくるまよひ　子のうとをとひてクリカ
ラ形のうちよりくまるねゝ後（ノチ）の納（ヲサ）を松葉紙よ卯杖のうろ
りよ事を伝　○二宮大餐（ニクウノダイキヤウ）　二日ゝ
王公
まうく事おり　○朝覲行幸（テウキンノギヤウカウ）　二日ゝ吉い天子の年始よ上
公事相原　皇并に世后の宴れ行幸

う事あり。仏事祝儀の字礼紀よあり。○臨時客　二日くりまい抔改用白氣よ
をよきまてわそひる事のあるえ字ヨろ公儀よハ見ど事あとあり此をとて
のあと中也年中行事）源氏物語よハ見ど事あとあり此をとて
さ、むらさきより朱ハ色をふ用ひて
郢曲乃くも筋抱ふそくよとハ
連歌　三ハよ　○たうやく　ねぎハ
ねぎハ　○改まる　ハ　○屠蘇　ハ　○松乃内　世俗ハ　○春
ねぎハ　○屠蘇之慶　えりた人を賀

上七

する祝ひ
書言故事　○曙新之慶　是を正旦よ書を以て人を賀
○叙位　五日或六日法ほの事よ叙ハ位と次第よ叙する
七日あをむまの白馬の節会　白馬ハ青馬の災を攘ふ
るれいとて正月ちるわをむまを見ハ年中の邪気を去とい
ふ本文をねよ七をひきて天子の出御ありて
たてまつる此馬の災と云事あり天竺の風俗ハ
へらも七足ある故よこれを
たゝ一といふ事ハ　○七日正月　世俗いわの世よ
のあつものを用ひ仕へ荊楚歳
俗七種の菜を羹そして云いふ
○霊辰　書言故事　○人を帳よ貼を　事文正月一日を鶏と
二日ハ狗三日ハ猪四日

ハ羊五日ハ牛六日ハ馬七日を人日とす此人ハ万物の霊なる本霊辰
なるゆへ一日に鶏を門に画くがごとく今も唐土ハ人を帳に
貼もとし
えし ○菜摘河神事 此七日吉野川にて の明神にあり ○御
斎會 八日大極殿にて十四日まて七ケ日最勝王経を講ぜられて玉体をいのる事也伝こ公事 ○真
言院御修法 八日宮人(後七日)是を行ふより七日をとる ある年ハ明年ハ胎蔵界年
くみかたるく修せらるは七日の御修法とい ○太元帥法 八日
其事く真言法ハ禁中にあり公事
首まて七日これをとこなる ○女叙位 八日女の位階を叙せらるゝ事な
る公事師ノ字ヲヨマズ
子とて椛葉紙より車の折比ひめ御ちまたにそゝる故く是ハ三子
を用らしと今や三子ハ天子の守りなる由緒も伝えや毎年中文

といふ 五位のくるを叙すとこ昔より ○女王祿を賜ふ
紀に初后委細と同し事を古伝ゑし公事
は日参後解史なと豊明門のうち御座の坐まで女王に ○常
祿をあふる事ゝ公事 女王祿の女ノ字ヨマサル也
陸帶社神事 十日常陸の國鹿嶋の明神の祭りは女のけ
さう人おのおのその名を男の文字を帯の
帯に書あつめて神前に奉る是をむすびの帯とて女の
ゆびおびの中に入れきてそのうちに帯の帯を男と契しくある
事とあり ○夷祭 十日摂の支そとこなり今大坂の
西宮なり 今も夷の中にても人く集り侍り御云く
○縣召の除目 十一日より十三日まて三ケ日と云く わがさい田舎
の事く外国の人をめして任官をさづけらるゝ事は
かやうに名づくるとや諸国の受領を任ぜらるゝ ○御
事とかやさぬくの中文公事根源ニアリ 斎會

○内論義 十四日御斎会の結願にて南殿にておこなひ
なり 同日御斎会の僧を御前に召て論義あれは内
論義と
いふなりや ○男踏歌 十四日の夜これおこなはれしかざしの
あらく武人かざしの綿をそへて散し殺
ふことといふはかざしのわたを帽子にさしたる踏歌の節会ともいふ女踏歌
は十五日の夜これおこなはれしかど代々よりおこなはれともいふは京中
の男女のあつまりてうたふをめしけるよりて年始の祝詞をはく
りし事をよりもてなせらる伝しゆへに踏歌のとはなともいはれ
る時は所々をうたひめぐる時は詩をうたひしさめしと伝り源氏
物語にも此夜竹河などうたふ事あり男踏歌に高巾子は
綿の花をつくる是をかざしのわたといふなり是も郷士の丈
を結ふ者をして踏歌の声調をなさしむる事文にあり
但十五
日なり ○十四日年越 世俗 ○綱曳 似大綱を引合て
勝負に作て占

遊ぶを
知し ○三毬打 は左義長爆竹 みそかとせ俗書にかける
三ぎっちゃうひしもあそびのうちにて是を毬打は昔
云毬まてうちける毬打を神泉苑に出して遊はらといへ
よし清涼殿の御庭にてなりしを成就の池にまちとものなく
しといへり今の世には正月のかざりの松竹をあつめてとおこ
めて扇をつけ吊かけなとしてはやしたてるもあり伝記
つまびく其説はつまびらかならず毬打といふ事を略して三毬
ちゃうといふやと師説には伝し又左義長といふ字はつき
ての説を此推よおわり爆竹はいふこうれ山臊といふ鬼人を祀
しるやかれをおどろかさんそ伝るとえ昔の祀る事文類
聚にはいふなり縁起に正月十五日は千なる乃燎火にて是を付おこなり候
義ある事は十五日の夕内裏では十八日ともあり
○上元日 十五日の事をもうつしていふなり 又十五日を上元
といひ燈籠を見る事あり ○御薪 十五日
是は

百度ともくく鞠をたてまつりて○かゆの木はゝ○名
玄内菊よねさめらる事とく出るをとく
づえ ちいさき杖をもて女の腰をうたるゝ事
うるふる者は男もまた女もとく出るをといふ○枕草紙よい名の事
とあり 狭衣よい名杖とつくりわづきのさまも
あづさゆみとよめりてくとおこなひてくと出る事也
いくさ 此はゝあづさ弓を物をもつまいも
年中の事也 ○正岡
乃御粥 此はゝ河内国の神おゝ名を
たゝて年中の四名の名を相もとゝ ○師子
頭の神事 此十二月廿日伊勢國山田よりる事也十
十五日十二月の大さい松をふる事なり ○賭
弓 十八日是は天子弓場殿にいでゝそ
弥たゝ玄来四者の舎人ともの射伝ふ事也罰酒

をとこるひらけるさまよい意味
い事果てのちたゝ対手よ酒とたまふ
○厄神まいり 此十九日 ○蕪民打来 こまはゝ豚の尼
ふんぬの事を祓ふ事也 神代よ牛此天王そうんが時
とえまて汝が孫永く繁栄とよめる
祓来ふ孫とよふ事をうけて
まふ尼神よ牛此天王ある一しし ○奥足の鏡もち 此二十日
餅をかさねハ 玄日今此一日 ○二十日正月とよ
ねんごろ世俗ふを
祝ふ ○天窓ひろこうにを
とゝめ於造記 ○伊都岐祭 下夷日官幣を造
代引絶えて 於荻 ○竹斎

廿日仁寿殿にて行る文人數を定て出ておこなはる事と
なん ○外記の政始（ととのはじめ）吉日をえらびて行ふ事也 ○吉田清秡（きよはら）（仇十九日女帝の御忌（ぎょき）仇北山の法仇上人の忌月にて十九日より七日おこなはる也 ○福壽草（ふくじゅそう）仇えりに花咲とて ○東風（こち）こちふく ○氷ゐる 氷のひま ○ゐてまくる仇氷ひまなし氷と氷とをまくる ○魚氷（うおこおり）
よのある月令五月のはじめ ○雪ふくる雪のこる雪けの水 雪さゆる雪のさえ月 雪の出づく雪もる仇雪ふる也 ○負氷（おいごおり）仇雪

正月の中し ○物魚（かずのいを）を祭（まつる）月令 ○本乃芽（もとのめ）○下萌（したもえ）或説二月と いふ仇月令に草木萌（きざし）動（うごく）いる氷の節の事也 ○くみたち仇菜名也 蟲海集二十四番の花の中に有 水の節也一假よきあるひい菜乃名也 ○若菜（わかな）仇菜名 初くさ仇ひなん或二月也 ○水の菜（みずのな）仇 ○根白草（ねじろぐさ）仇蘘荷（みょうが）○若菜 ○姑子の菜（なめこのな）○よめがたらの ○ふき仇 ○梅（うめ）この花 ○梅干（うめぼし）梅 ○柳（やなぎ）
学而物うらびまの初いと同もと読へき也 ○柳 ふきのたうは 梅干 梅 雑物編 白ひ草（かざこ）青苔又草 白梅 行平物 住吉物 好文木 川そひ柳 川そひ草（かざこ）

玉柳　春の柳門の柳（関路の古事）
目なう柳　こぶ柳　はたこ柳　糸柳　○鶯　鳥　倉
よむ名は　あさと名は　学の琴　学笛　枝双紙　よあり　仙つた
へみとの笛よつて吹あつ　名の事よあつて　黄鸝　黄鳥
詩　○佐保姫　三月よ　○水ぬるむ　○あたゝか
なり　○ねてく　○絵　○春霞　○春
雪　○万葉　○楽　○春駒　○梅がえ　○よ
き柳　○大若　○子日　○夜　袖　学衣　柳のきぬ　○松の色　○
ひなみどり　みどり　○霞　三月よ　公宴　春の衣　春の袖　春
の笛　春　横笛　一切　春の雪　春よ雪　○春の宮　東宮
の古事　○春の雪　○春の鳥　○百千鳥　○野老　ところ　○
春の宮　東宮　○春の雪　○春の鳥　○百千鳥　○野老　ところ　○
春の宮　東宮　○春の雪　○春の鳥　○百千鳥　○野老　ところ　○

二月きさらぎ 梅見月(むめみづき) 小草生月 仲春 夾鐘 如
月 令月 陽中 正月はのどかなりしを此月さらに
りいしきを更に着るなればきさらぎといふ之奥義抄に見へたり
其噂を神は勾芒 律夾鐘にあたるといへり 事文

○中和節(チウクワノセツ) 二月一日之 ○驚蟄節(ケイチツノセツ) 二月の節気之 ○初午
初の午日いなりまいりするなり ○東福寺せんぼう 日 ○水間寺(ミヅマデラ)
初午詣(ニウデ) 和泉の国に有る観世音となり ○本妙寺(ホンミヤウジ)祭(ニイリ) 初午 同じ ○献(ケンシ)
生子(セイシ) ぬかこてに二月一日にあるき俵に百 一穀の粉(シフ)李の巣種(ソウシユ)を入て五器といふ ○釋奠(セキテン) 月上の丁 釋菜(セキサイ)二
此日大学寮(ダイガクレウ)にて孔子并に十哲乃影を祭らる事之礼記の王制(セイ)
に菜を釋幣(ヘイ)を奠て先師を礼するとある故に 釋奠とも 釈采

ともいへり 訓にはときまつりとよむと かや年中
に二月八月あるなり 釈奠といへるは支那にあり ○春日祭(カスカ) 上ノ申日
先未ノ日近衛中将勅使にて 南日は内侍 ○大原野祭 上卯日大
むらさき車わり上卿弁も参る 公事
ちかきあたりにおなじとかや
これも春日の同神之 公事 ○祈年祭(キネンノ)(トシゴヒノ) 四日太神宮以下三千百三十二座の
神をおほやけにまつらせ玉ふ豊年
をいのるを祈ふよしなり 公事 ○祇園御八講(ギヲンノミハツカウ) 八日於 感神院
に ○列見(レッケン) 十一日公卿弁少納言外記史等と冠に並びとゞまり
て太政官にてとこなはる 公事 六位以下の勤
続あるものを擬て式部兵部の二省よりひきゐてまいるを
上卿めしよせて容儀(キリヤウ)をえらむ列見といふとぞ 公事 ○吉
野の餅なり 二月一日法人にてくばりまはるとなり ○比良(ヒラ)乃八講

佛家には此日を常ありて行ふ ○薪(タキヾ)の能 佛南都にあり七日より十四日迄 ○二月堂の行 佛南都にあり夜をこたい松をふりひる事あり朔日より十四日まで云く ○遺教經(ユイケウキヤウ) 佛涅槃に入給んとて此經を説玉へるよし世讀問答にあり九日より十九日まで小北釈迦(シヤカ)堂にて此經を訓讀(クンドク)し釈迦の名号を唱ふ之説(ソレク)經某れ千本ノ釈迦念仏といふこれハ如輪上人なしめらると云く ○佛の別 二月のころきさらし 佛涅槃像 佛涅槃会 佛雪乃あて 佛 ○嵯峨柱炬(サガノハシラタイマツ) 佛十五日 ○真福寺常樂會 旧日 拾芥 ○積塔 十六日或不落とかけり坐頭の法事く ○春分乃節 二月の中く ○撥月夜 ○社(シヤ)日 春分のちかきをさ戊日之或立春の後第五戊日く

是なつこれ五穀の神とまつる日く吉云 古事ニアリ はじめ社日よりけうといへり ○治聾酒(チロウシユ) 社日の酒をのめハえミをきを治すると云 ○社翁雨(シヤヲウノアメ) 社の神舊水(キウスイ)を含せさるゆゑへこ雨保降事と云 ○社日には必雨ふる是を社翁の雨といふこ指要保よあり社の神ハ后土也勾龍(コウリヤウ)氏ともいへり共工氏の子也水土を平げつる故に社にまつれり木を植て社主とせり夏にハ松殷にハ栢(カヤ)周の世にハ栗と論語にあり 王者五色の土を封じて社とし禹を建と禹貢注にあり ○參會(エ) 廿二日聖徳太子の忌日にて天王寺にて法事あり ○宗寺家勝會(サイシヤウヱ) 十九日より七ケ日延久五年に始ると云く 拾芥 ○天王寺聖靈(ノシヤウレウ) 廿二日天 ○小野の忌日(ヨンキ) 満天神の忌日なれハ吉祥院にて八講あり菅原氏の人ておこなふと云す ○季(キノ)御讀經(ドクキヤウ) 或三月中宮にて

大根若
行陸分○二日灸仏○同生かり日多くの二八月あるる事をめの季を
ふりのりのちとよ
字をくて秋のり　彼岸仏　時正　皆も灸ご後の彼
天の灵ふなよ樹あり二日よ実て七日七枝にして花秋ノ月
よ実の桃を帝釈ホ名集りて七日乃往世乃の名
人恐人の名ともせりねよ此は皆七りのおと
若葉を降するといて此樹芸花の記事を○ムちを元
を生子仏○雁ヤセくく鴈尾乃
雁白色の雁ふ性云号渡来雁のきこちくち
とて白きお出て往くくり雁巳ガをきとろて山へ向
るなるくし
めとてく○鳥の巣ふ古○鳥の鵆○雑子ヒバリ雉

上十五

鶏塾の呂后の諱を雛といて此諱を避さきてを世よい雛を此鶏とよふ
とより鵆ふ雁ずこさくり物の雛なおをむきへ
い麦ご麦雉云麦い雪小雛のおく恋をこさ記未明ゆさてる
を鳴雪鵆ふ雁ふ雁ずこさくり物の雛なおをむきへ
すこさくとい此のおくぬ事ご○燕ふ雪ふ
ほ屋る
ほ巣○魚雪魚よ雪ふ
或ハ別ご云○帰る雁乃の名称乃のわ
乃仏乃よかさこを
むさひてもをふり○雲雀ひばり雲仏を花の雪を笛して
吹て取る事ひばりの仏
○うを俳　ひく琴○こ清ふ○すめ子ふ菜○蝶てふ
胡蝶　蝶俳　蝶くひ
あけものてふ日

○蜂の巣仏○蚯蚓俳○蛙かへる仏

ロひきがへるロ
かへる子ロ井蛙ロ○地虫出る俳○かげろふのもゆる
○いとゆふ 糸あそぶ 遊絲 ○猫さかる俳 猫の妻恋ロ○鳥の巣
かゝるは○初鮒(ハツブナ) 鮒膾(ナマス)ロ○ところ俳○飯蛸(イヒダコ)ロ○志
じみは○田にしロ○たにしあへロ○初稲ひろは
月令ニ始電
春分の末乃候○八重の梅 紅梅(コウバイ) 城中梅俳 座論梅ロ 桜梅ロ○鶯梅(ワウバイ)俳○花
を待○初花○初桜○枝垂桜俳 くれなゐロ うそ桜ロ ちごさくらロ
○糸桜○玉桜 志ろ玉桜 いせ桜俳 そびら桜は ちりつかねロ 二階桜は つゝく桜谷阿のと談り 貞徳

云桜は桃之花を移ひてはあ之假令
花とるくても花のむれはあ之○はぎ木俳○苗代茱(シログミ)ロ
○焼野 山を焼 芝を焼○やまのすき○さくろの房
○荻の焼原○畑やく 焼畑 ちきうへ 畑之事○田をまく 田を之き○苗
代○水口祭(ミナクチマツリ) 貞徳云苗代に水まくる所へ種ぬきさすとまつる事也○種まく○麻
まく○うど俳○ちもいは○ほくしは 筆つばな 土の筆○杉菜は
○防風(ハウフウ)○さねかづら 紬中ぐ ゝ葉は○芽ゑじき○芽れ
るゝ○菊(キク)の若葉(ワカバ) 萩のわかば 萩のりくる るゝさし○蕨 子蕨 早蕨俳 蕨

三月 弥生（於岐）窮月 季夏中旬事文 清浅やおひ月とよむをおよそ仲春よりくさ萌出る草の末月弥生おひ中旬ともいふ俳諧季寄月花もこれに同じ ○己巳日 上巳 三月上の巳乃日水辺にてくさ〳〵の汚穢を祓ふ用云〻津支のそら浜三月三日を用てこのひなまつりと云 ○次癸の吉祓 もハ朗詠に原記周年一思観文と云 光源氏須广浦に左遷乃とし三月一日巳乃日陽明門乃おきてみそぎしもより舟まくらをつくりてるなせし事をはじめ乃ことなり 曲水乃宴 盃をながれむかいなどいふ名西漸ともいふ盃をとりて久人を数ふ事あり

多仏宗廳（朗詠） ○角ぐむ芦（アシ）芽（ハ）沼（ヌ）○たんぽゝ（仏ばゞこ） 堀川百首ニアリ ○苔（チヒロ）日（ハ）花菜（ナ）口 ○苣（チサ）口川ちしや（ヒロ）ともいふ ○海雲（つくゝ）口 ○紙魚（とびのこ）口 ○いうちぐさ 是は蟲魚集ニ云衣の丸いてうの形ニ似たるゆへ紙魚（シミ）ともいふ ○ゑいわうそ ○ひとわう

松原よ
又ふたゝび○桃花の節　三日桃の酒供菓餅口ふくめ
桃花を酒よひてのめば百病を除き数を満ると本草
ありとかや扨女子多桃花生玉洞柳葉暗金塘とよみ
ひ柳の枝をとり付ける弁むり一間の遊玉堂(ユウギョクドウ)乱て彩花
盛(サカリ)こぬ世もあよある人菓餅を遍くれおくせ
をめでく宗(ソウ)徒よそれまでといてそうろうごと改
うて世治り付ける十節録云彩合八三
月三日にある花笑に成とよ説あり懽ある名舎もあるを京
巷いつをする事あれい歟ふりて玉へきをといて但花の明
皇陛下の事よ開難をあるよ住よきる乳ても治務好を
かまへ春を五百人をこてをを例いせまるる事文政癸
酉春二月をと改元ふ本朝よ朱花依の
上十八

天保元年三月四日より御鷹十羽ゝ
拾羽ゝ召(メサ)れ仮らるゝ事と拾て
るゝ故もありねべうちおりせていふ
多の事ふをひろ事の由仮まいりふ
ゝとひのいと此乃俗よ仁をてりる
新續大観は集うそやくゝ至ていと
青(アヲキ)をふむ　唐ノ俗上巳三士女趣戯スルヲ云也又三月三日上臨(ノゾム)水祓(ハラヒ)ス
履(クツ)とり事盧(ロ)公記錄餘俊よあり園栽活ニハ
人日ニ号人遊戯ル事云て○御灯(ミアカリ)を小(コ)戸(ド)にて事(コト)ありて
三ゝき男よに火とろかして小夜よ彼をふれるとやいふ敵よ
小(コ)さきに法(ノリ)生を表て三ゝなはおありなどの
師(シ)匠(ショウ)の家勝(イエカツ)と云　七日はち天武天皇の御代と毎年七ケ
言務(コトワザ)五経を講(コウ)ぜらるゝとあるよ

○石清水除目のみそ 中午日みそかに先中辰の日試楽を奉人竹葉のりとして竹枝とうぎてさし
仁寿殿乃下より南おもてへ出すなりて倩使を場の五人求まうしひきよりて三献の事を八陣文よ初らせ
よりて三献の五献の事をまがりつけの事あり元をまのれつう丸と
て名々色ゝ色ゝの花を折かざしの事を飯飯の敷寝のさめよ約ひ
て名々色ゝ色ゝの花を折かざしの事を八陣文よ初らせ
名云事相原よおり○弦花祭 二月の午の日の清涼の節のま
き名称祇園ときとなるゝとうや云事○寒食 冬至より百五日の清涼の節のま
いてゝそいうろうに炊ま推といふ奨人火にやきうせりとして三日は祖
火を改とく新武帝小方こまむに老かのかよいさおい城ろくんと
て元を食とにおせり周挙井州の刺史と成りなをきん火を去
て民の令とそこるまるま祖ごと紀の貴去のなまにおゝしう井

外の民よ初て改食ゝ日ゝ
なを元を食ふは焔火を改ふ作る事とせしとや○杏の粥
を食ふ用ゝ事 鄴中記よおり○東ゝ乃饌 芝も日お
事文青飯也 飯也 芝も元を食ふ楊桐の枝ふをとて飯をは染を出
書くて出おりふれとくく乾石飯といつり出
乾石飯といつり出 飯也 芝も元を食ふ楊桐の枝ふをとて飯をは染を出
をまる飢飯也 ○鞦韆乃戯 半仙のたのしき出 芝も元を食ふ青精飯
ゝ架を立て土女ゝ上て出ゝ立てを縄をひきこゝてあそぶ事
あり唐の天宝年中に文女を食に出鞦韆のたゝ出 芝も元を食ふ青精飯
ものゝことゆると帝ま仙の戯とゆる
まへること天宝年中に文女を食に出鞦韆のたゝ出 芝も元を食ふ青精飯
ありぬ○清明乃節 三月の節
○榆柳の火とす 榆柳の火とそいう元を食ふ火炬を改るを清明のせつよ
榆柳の火とそいう元を食ふ火炬を改るを清明のせつよ帝より元ほよ

ろうそくの光うつのさざえ
書云放事をとり出し事く○住吉乃塩干 仏三日 ○土佐
の海よ現石を 仏同日 ○一楽(セウレ)まつ 仏同日 ○霖は祭
は五月ごろ ○石山祭 仏同日 ○霖は祭
は八月 ○水尾祭 はれ日雲のたゝずまひよと云つゝきとかく拘(かゝや)ると野椎
云祝詞あり ○泉涌(ユジ)ち 開山(カイサン)忌 ○言雄活(タカラヲケ)ゑ 云仏 ○やそひ
祭 十五日於 ○吉野の玄武 仏十一日 ○礼拝講 仏十二三日 嶽山
行 ○祇園一切経会 十五日於 ○比良(ヒラ)祭 仏十五日 ○壬生(ミブ)
お八王ち祖師

の念仏 仏十四日より北野より生飯を振捕を始ゝ
會(エ) 十五日康保年中に大内記菅保胤(スガノヤスタネ)犯云結の後のつゝとをろぎ
人として文を先生の学をもとめて三月九日のすゑりとれお
こるひとぐめり仿り会(エ)趣(ムキ)朱云ふ一説山月正(マサ)と紀(キノ)秀名
の低(ヒク)ものもおなじ一朗(ロウ)通勅学院い三除の小壬生の西いやの崖
北森を法(ホフ)花東武の学生おまびして
あるしおりて西条大炊のあようる ○嵯峨(サガ)義の大念
仏 十五日於 ○千本念仏 はちの花盛より北野より ○浅茅
祭 十八日 ○御身拭(ミゴヒ) 十九日 雑係の尺迦の荒像
供(ク) 廿一日 仏法大将入定の日のゆを東ちれ法事あり
云 ○稲荷(イナリ)祭の

の御出 中ノ午ノ日ありて祈祷 ○ 順の峯入 吉大峯ともいふ ありて ○ 田嵐(テンソ)となる 日令雲霧甚だ 節の気候なり ○ 霖雨(ウキノサヨヒ)の 三月中なり ○ 薄生(ウッラ)とむ 日令穀雨前後 乃気候なり ○ 永き日(ナカキヨソ) ○ 夏至(チカキ) ○ 夏至(ナツ)の 夏の始 三月 ○ 暮(クレ)の春 夏の終 ゆく夏を惜む 夏の名残 ○ 春過て 夏となりぬ ○ 夏深し 夏さく 仰おろそ 三十日 ○ 時鳥(ホトヽギス)の巣 ○ よこと雲 ○ 雲よりも 雲まじり 初夏集の詩の 心なり ○ 鳥う

つる 貞享三年三月の末より法令古葉よ ○ 乃ありや 貞享三年のありや ○ 麦藪(ムキヤウ) 仰おひふ ひくるき ○ 桜うぐめ ○ いつのめ ○ 柳葉魚(ヤナギウヲ) ○ いさ鮎 あゆこともに小 ○ 菜(クハ)こ 鮎ともに仰 ○ 彩菜摘 ○ 桃 姫桃 雛桃 桃の実(万葉) ○ 山桜 花桜 八重桜 家 ○ 桜貝 ○ 桜魚 ○ 桜鯛 ○ 鮎

○花乃波○花の波　みる花をそのまゝ波のやうにいへる事にて外にも例多し

○花の姿　花のすがたなり

○花の笑（エミ）　花の開けたるを笑ふといふ事古歌にも多し

○花園　花畠　花の多くうゑたるをいふ

○花の宴　花のころ人をまねきて酒宴をもよほすをいふ

○花の袖　花の時分の袖の模様などをいふ

○花の扇　花の絵などかきたる扇をいふ

○花鳥　花とやとりとを対していふ事にて花と鳥とをいふなり

○心乃花　負惜しき人の心をいふ

○花曇　花の咲くころ空のくもりがちなるをいふ

○花の夜　花の夜の月夜などをいふ

○花の雲　花の咲きつゞきたるを雲のやうにいへる事にて外にも例多し

○花衣　花の時分の衣服をいふ

○花の錦　花の咲きつゞきたるを錦にたとへていへる事にて外にも例多し

○花の雪　花の散るを雪にたとへていへる事にて外にも例多し

○花吹雪　花の散るを吹雪にたとへていへる事にて外にも例多し

○花の露　花の露にぬれたるをいふ

○花の雨　花の咲くころ雨のふるをいふ

○花の朝　花の咲きたる朝をいふ

○花の夕　花の咲きたる夕をいふ

○花の山　花の咲きたる山をいふ

○花の里　花の咲きたる里をいふ

○花の都　花の咲きたる都をいふ

○花の色　花の色をいふ

○花の香　花の香をいふ

○花の匂ひ（秀吉）　花の匂ひをいふ

○花の名所　花の名高き所をいふ

○花の名木　花の名高き木をいふ

○花の枝　花の咲きたる枝をいふ

○花の木陰　花の咲きたる木陰をいふ

○花の下　花の咲きたる木の下をいふ

○花の盛　花の咲きさかりをいふ

○花の散る　花の散るをいふ

○花の残る　花の散りのこりたるをいふ

○花の跡　花の散りたるあとをいふ

○花の名残　花の散りのこりたるをいふ

○花の春　花の咲く春をいふ

○花の秋　花の咲く秋をいふ

○花の冬　花の咲く冬をいふ

○花の夏　花の咲く夏をいふ

○花の年　花の咲く年をいふ

○花の月　花の咲く月をいふ

○花の日　花の咲く日をいふ

○花の時　花の咲く時をいふ

○花の頃　花の咲くころをいふ

○花の比　花の咲くころをいふ

○花の折　花の咲くをりをいふ

○花の間　花の咲くあひだをいふ

○花の内　花の咲くうちをいふ

○花の外　花の咲かざるをいふ

○花の後　花の散りたるのちをいふ

○花の前　花の咲かざるまへをいふ

○花の上　花の咲きたる上をいふ

○花の末　花の咲きたる末をいふ

○花の元　花の咲きたる元をいふ

○花の中　花の咲きたる中をいふ

○花の端　花の咲きたる端をいふ

○花の横　花の咲きたる横をいふ

○花の縦　花の咲きたる縦をいふ

○花の斜　花の咲きたる斜をいふ

○花の表　花の咲きたる表をいふ

○花の裏　花の咲きたる裏をいふ

○花の左　花の咲きたる左をいふ

○花の右　花の咲きたる右をいふ

○花の東　花の咲きたる東をいふ

○花の西　花の咲きたる西をいふ

○花の南　花の咲きたる南をいふ

○花の北　花の咲きたる北をいふ

○花の上　花の咲きたる上をいふ

○花の下　花の咲きたる下をいふ

○花の前　花の咲きたる前をいふ

○花の後　花の咲きたる後をいふ

○花の内　花の咲きたる内をいふ

○花の外　花の咲きたる外をいふ

○花の間　花の咲きたる間をいふ

○花の中　花の咲きたる中をいふ

○花の端　花の咲きたる端をいふ

○花の横　花の咲きたる横をいふ

○花の縦　花の咲きたる縦をいふ

○花の斜　花の咲きたる斜をいふ

○花の表　花の咲きたる表をいふ

○花の裏　花の咲きたる裏をいふ

○花の左　花の咲きたる左をいふ

○花の右　花の咲きたる右をいふ

○花の東　花の咲きたる東をいふ

○花の西　花の咲きたる西をいふ

○花の南　花の咲きたる南をいふ

○花の北　花の咲きたる北をいふ

○花の上　花の咲きたる上をいふ

○花の下　花の咲きたる下をいふ

○花の前　花の咲きたる前をいふ

○花の後　花の咲きたる後をいふ

○花の内　花の咲きたる内をいふ

○花の外　花の咲きたる外をいふ

○花の間　花の咲きたる間をいふ

○花の中　花の咲きたる中をいふ

○花の端　花の咲きたる端をいふ

○花の横　花の咲きたる横をいふ

○花の縦　花の咲きたる縦をいふ

○花の斜　花の咲きたる斜をいふ

○花の表　花の咲きたる表をいふ

○花の裏　花の咲きたる裏をいふ

○花の左　花の咲きたる左をいふ

○花の右　花の咲きたる右をいふ

○花の東　花の咲きたる東をいふ

○花の西　花の咲きたる西をいふ

○花の南　花の咲きたる南をいふ

○花の北　花の咲きたる北をいふ

○花の上　花の咲きたる上をいふ

○花の下　花の咲きたる下をいふ

○花の前　花の咲きたる前をいふ

○花の後　花の咲きたる後をいふ

○花の内　花の咲きたる内をいふ

○花の外　花の咲きたる外をいふ

○花の間　花の咲きたる間をいふ

○花の中　花の咲きたる中をいふ

○花の端　花の咲きたる端をいふ

○花の横　花の咲きたる横をいふ

○花の縦　花の咲きたる縦をいふ

○花の斜　花の咲きたる斜をいふ

○花の表　花の咲きたる表をいふ

○花の裏　花の咲きたる裏をいふ

○花の左　花の咲きたる左をいふ

○花の右　花の咲きたる右をいふ

○花の東　花の咲きたる東をいふ

○花の西　花の咲きたる西をいふ

○花の南　花の咲きたる南をいふ

○花の北　花の咲きたる北をいふ

なりこを桶俗花生は花入は花筒は
筌(カゴ)籠(ビク)こゝろ〳〵花を入るゝ籠なり○花車 筌笠 花
の造物 俗 筌ゝ〳〵花うつす俗花のまゝ
かされるこゝの車よ花うつすい非筌非花と云俗
きるをとりされるゝ花うつすい非筌非花と云俗
正筌よ女へきてやいのゝ○花むしろ(ひ)は○花車 俗 ○花津守(ミ)は
をうて後とすとよき津天竺遠津
よりこれを花いくさと云習せり○花乃宮 俗花之函
○花莚 花蘆(ハナアシ) 俗筌の苫也
るをも花莚と云○壺をうつす心柱の花を
花の名をいゝぜい正筌こと負惜いて○花乃路○花の郎○花の

躍(ヲトリ) 俗花ておよるゝ
なれい夫と作説ゝ○花くし(は)○壺花(ツボハナ)○落(ヲチ)
筌(クバ)は○花守(モリ)○梨花(ナシノハナ)山ゝの花彩のまゝ
○花乃郎(ニハ) 俗○筌ゝ如○花乃あるゝ
堂(タウ)掛ゝるし 称ゝる花○幸夫(ブル)ゝ
つしゞゝる生花つし俗雪つし始つ
のつし俗笑義の山まよあう思つし 松川よよめう
○山吹(ヤマブキ) 歎冬ゝ負惜ふ
燵の山吹といひ朗詠もふ住の山ふきよ用給へ事ゝ
まてい只やぶき○末成乃花ゝぎ 俗○沉丁花(ジンテウゲ)は

○木蓮(モクレン)花は○辛夷(コブシ)花は○椿(ツバキ)の花は○小米(コゴメ)
乃花は○こでまりは○小梅の花は○庭桜は遅の桜乃
をよいあくもの○馬酔木(アセヒ)花○杏子(アンズ)の花(俗)○ぼんこの花(カラモヽ)は
○檜(ヒキ)花は○榧(カキ)乃花は○やまとゝぎは○栗(クリ)
の花は○藤(フヂ)花あるひは○芍薬(シヤクヤク)花ぼたん(俗)花ともに花
つゝじを(俗)○芽花(ツバナ)
うれ
○うまお(俗)○杉菜は古茶はもゝ○拘杞(クコ)(俗)○とくさ○こつむ(ふこ草俗)
茶つゝこはうき茶は○春菊(シユンキク)は○お

づは菊は○からふ菊は秋きく○桜草(さくらそう)は九輪草(くりんさう)
○馬蘭(ばらん)は又夏○忍冬(にんどう)の花は一説よめなし
子草は○眉化(まゆはけ)の花は○金盞花(きんせんくわ)は○千日紅(せんにちこう)は○丁
字草(ちやうじさう)は○仙翁花(せんのうくわ)秋○菊(きく)
椹(かへで)は○いさゝむは○三葉芹(みつばぜり)は○三
月菜は○三月大根は一説二月といふ大やう三月前句に用ゐるや
○ぜんまいは○春雨(はるさめ)三月は○わさびは○や、ふし山(名所ふしの山とよむ事あり)
○ちゝろ衣表白裏赤おもと枕花共に従く○山吹衣表きいろ裏はえぎ

○うら山吹 青黄の ほゝ〳〵衣 うら青

四月 卯月 卯の花月 花月 之月（孟夏）孟夏 中呂 初夏 余月 卯月といふ

律中呂より生じ中呂を応じ 負陰（フヲスメル）抱陽 沍（ヒエ）ず 青簾（アヲスダレ）更衣（コロモガヘ）一日 ○白重（シラカサネ）更衣の時の衣なり ○始供氷（ハジメテヒヲクグス）一日 ○孟夏（モウカ）の旬（シュン）一日 扇をつかふ ○あふせ 俳句ざぬきは 夏好哉は ○主水司（モンドノツカサ）

氷をとり設をきそめ 氷室の節会 ○扇をつかふ 扇のおとて 奥まる処より出る 公事根源 ○鏡懸（カケ）二献の頃 愚見抄云 江州つくまの沖神の祭 ○麻祭（アサマツリ）一夏 初の午日 男の投松と 鏑をいさできて女の後る事あり ○稲荷祭（イナリ）は日吉神

弘法大師東ち玄奘の門稻を乞ひ受けて法ちの幹幼をし
こ東ち建立被祝してより稻荷を幹的の門名よりこと
者と云ふ〳〵家よあ亜を
座ありそのは招ちるいこの日教をとくう生芝ち
出者が家いいまをおびといつるかこをこちにを探起る○つまごと
うだ芝稻荷山よ強産の門地をとてあるれ〳〵芝こを重容
とた師こつくうきばこのひて非事の言おまより話
了非要よりなる机め猫をという芝法非れちれくへ芝除非く○大神の条
卯日 之條 の事あり○山科条 上巳日○平野条 上申日○松尾
条 旧日今八 酉日○當麻条 上申日 大祓○杜本条 同日 同内○南 二十

宗条 上酉日 近四方一人乃使あり杜本南宗
旧日楠氏 の社神こ○水屋祐 俚南招まる日にあり
三日四日五日○廣澤○就
田条 旧日松尾社大和よあり杜本廣澤八大忌神祇四八
風祈こ風あの祭と塗き事あの祈よ公より祭か○山澤日
も使 俚三日或ハ 三月よみ○八瀬条 俚辰日ろ
の到又八のは女誕の経册を式云 二者より こて多ろを大原
五香水 浴佛 ろよ話ちに亦をまつけ五香水を
もて仏よ浴して祝意をあろと祭は記よる○戒壇堂
の開帳 八日山門○山澤条 俚同日天王条ミ
童使と子○多賀

祭 仲上巳 江州 ○江州八幡祭 中卯 ○手安天神祭 上にあれ 京午日 ○伊勢神衣祭 十四日麻績の連といふ氏人麻をうみて服部を織て神明にたてまつるをいふ ○日吉祭 中申日山王祭之大宮聖真子二ノ宮八王子客人十禅師三ノ宮以上七社の神輿を舡に唐崎公事 て御供 ○賀茂祭 中酉御形および桂かつらを上賀茂社下賀茂社雷両神のみまへにたてまつるをまつる也 御形の日といふこれより人々葵桂のかつらをかくること又世俗にあふひまつりといへりなど祭といふも此祭の事なり ○中山祭 同日これ准后にておこなふ公事 ○吉田祭 中子日吉田の末日此事之中納言山城に建立ありり ○関白の賀茂詣 中申主人は象車にて地下殿上人前駈あり御幣随身檻などかざりたせ琴持数寄箏

臨とは物を石清水の東にひきかへ祭なりけり公事 ○三枝祭 率川祭をいふとかや三枝の花を酒樽にかざる故に云之神祇令に見ゆまつりの祝子のせらる公事 ○千団子 仲十六日三井寺の鬼子母神子童のまつることぶんごなる ○逢義祭 仲中ノ亥愛宕のまつりとや ○向日明神祭 中居 ○久世祭 中巳 ○清水地主祭 九日 ○當麻法事 十四日中将姫の忌日なり祈り供者と以ふ也 ○土塔會 天王寺にあり ○日光祭 十七日 ○菅宮祭 中午江州 ○花供 廿一日高野大師の法云を立給之 ○神祭 忌さき ○榊とふ ○梅天 孟夏の天気をいふなり書言故事 ○和清の天 文選

にあり保氏よれり○小満（ショウマン）節四月の（中之）○麦乃秋風（ムギノアキカゼ）
してみ侍とそ
○麦秋（バクシウ）月令小満○青麦（仍）○菜花（ナノハナ）○あら足草
北日草名ある草 牡丹（仍）
蜀をは花豆はよろひ草
○芍薬（シヤクヤク）仍名びき草 陸奥にそ○杜若（カキツバタ）
かよをる○葵草（アフヒ）二ある草
ういけるる 菱つる○かるかや ひる仲
なの名 菱つる
○たち葵（仍）○こあふひ○玉まく葛○一八（仍）○恋や
が○蓋蕨（サウビ）は○苅子（ケシ）の毛は○わらびは○かざく
ら成は○鴨足草（キンキサウ）は○岩藤は○とら苅は○茶引

草は○柏ちは（負俗説多し又一説
扶し可依用）○卯花（忠度卯木の）○桐
根卯木（仍）○若枫○若葉○若葉乃美しつゝ葉乃木草
○いつゝ葉○茂る木草○夏木立（タチ）（新樹 陰葉 木の下やみ）○常
盤木の落葉○桐乃花（仍）○美人草（仍説こあり 妖
いさゝをも云り又唐仍りともいふ事を云ふ
を仍去よ四て可定事ノ但師説にあるあり）
○きはくち花は○てまりの花は○玉たまは○えく
てう毛は○山芭乃芽（ヤマヂシヤ）は○厚朴（ホウ）の花は○藪椿（ヤブ）は

○さくらんぼは○桜乃実は○竹の子たかんなたかうなとも
○すの子 俳 ○岩梨は○蕗は○蓼は利根 荢 ○蓮乃
うきはは若根は○郭公 鶯 花友なとともむかひても夜にぬき 四季のたとさ ころぎら 叶の名
子規 不如帰 杜宇 杜魂 俳 ○かんこ鳥 俳 ○かん鳥は○葭原雀 きやうくし鳥は
○蝙蝠 俳 かはほり ○鹿の袋角は夜野ゆくとりのはなはなもの またふいとれるあり
○ほとゝぎすや籠 ○飯鮨 俳 福鮓の 雀鮨は○棒振虫 俳 ○蚊
故 在 ○蚊帳 俳 故の蚊の 夏そめは○卯もくぢ降 ○卯乃花衣

○短夜 明やすき 短夜 ○一夜籠 夏入 俳 ○安居 形心静接曰安 要期此住曰居 経釈氏要覧ニ 委ク夏行ト云

五月 きさき月ともいふ 日とりを異にしてさつきといふ 律家實よわるゝゆゑ
より月の名とす ○かえ茂の足ぞろく 俳一日殺ぐの試なり ○松本祭 日吉
の祭なり ○献菖蒲 三日あやめの薬 ○あやめのことおなじ 落の東西より
又付の花とおりをして回く亦去く 山城の国宇治より出 ○内裏司供ふ瓜
つるを供をとゝ 拾芥 ○五日の節句 天子武徳殿より出ありて
高会をれこれを試ほよ 汚もくらわや免のうつくしきをうら
く曲つ糸のさゝあやめのはくえをとそまろ事などあり 公事
○端午の節 端又とも 端又ともいふ 免の又りとよむ
るう又月い午の日こよりて 端午古いふ

もちくめのむしとり忘し ○菖蒲 あやめ菖蒲刀菖蒲のり
あや免らく 昌陽の百節 しやうぶおび さゝぶゆ さゝぶけ
ゆきたちよこれをいふ 菖蒲の根ろ病といやを少く百事ろ
入仕ろ事いち事なま又大載れ月今るとゝ事よ仕り 世諺つ
養季吹事ろよ大載れよい蘭湯の事をいちぶゆの事ハ不足
事 追ろ事仕ゝ只あやめと用る日なる少よ刀にものろも
おびも用るも用ろ事い事叶難記よあり三あよい
たゞ永き根とよ
もあや免の事 ○薬玉 くすだまのむ 長命縷 命縷
依病必五月ふおこる故よりろ事ろ五色の糸ゝて洞てひぢふられ
いる色糸とそらよとりを事又仕ろ五色の糸ゝて 世諺つ 季吹事ろ菖蒲を
用るゆへ免べ一ちやれをいちぶゆよいあやめとよめる事 伸湯お話よ

仿るもやまよいんもうのあともよめう部ともやさけきの
むりけとよめるも号をいひうあう風俗通よいも令端陵
令端ともいひ五兵と辟(サク)る娘よ辟兵鏡(クスリビ)古
いてう神学記よい條を述(ツム)(キツヒカリ)といる号るう○菓日五月五日
をいふ
○茅草摘競(キツヒカリ)述これ百茅指津也○ちまき菰苧(ちまき)
かさうちまき(ちまき)かさるうちまき(ちまき)角黍角粽雅粽茅粽
粽九る粽高辛氏の恐(おそ)る五月五日よ沈めを灵(たま)ふ
とおてくをるやうもう或人五色の糸して粽とし沈(しづ)めよ入(いれ)ら
五色の龍(りう)と成(なる)る史(ふみ)ふるつぎおこれ(おこれ)ともいひ又楚乃
屈原(クツケン)が汨(キツ)羅(ら)よ沈(しづ)しと(こと)をよりちまき(ちまき)ちまきと(こと)
よわりいまも端午よ拾(ひろ)ふおお集(あつ)まるとよはちまき(ちまき)ちまき(ちまき)と(こと)いふ天福(てんぷく)
かさるう粽とかくをろうよい角黍九
粽るとのさはくある由(よし)津文数聚(ふみあつめ)ふ百

むりを古例(これい)ふ甲冑(かつちう)と等(ひと)しく兵(つはもの)と号(なづ)く所(ところ)以(ゆえ)ふ
古(いにしへ)といまはるこをこうまとよ仿(まね)るう○艾人(ガイジン)蒲人(カバ)事文天師(てんし)と名(な)くけるこし
て門戸の上よ仿(まね)ると艾人(ガイジン)蒲人(カバ)をならべ
やめのひげと作(つく)りをして門戸の上よとく津(つ)わり吾(われ)も端午よ
人形(ひとがた)を彩(いろど)の上門のおよとれをく津(つ)出(いだ)し天師と名(な)くきて郎の
人の貴(たふと)きあるくれも叶(かな)ふ出(いだ)よ紙(かみ)をかきて要(よう)仿(まね)ると愛(め)て門戸乃
あよくそをく津(つ)叶(かな)ふよびよ仿(まね)るう○艾虎(ガイコ)といすぐ草(くさ)もよよりきて
ふどうし或(あるい)ふ色(いろ)ふの糸(いと)ふ彩(いろど)りて小虎(ことら)を作(つく)りよりきの形(かた)よみて
衣(ころも)よいてきて邪気(じやき)と辟(さ)ふ○粉團(フンタン)を討(イ)る湯粉團(タンフン)水雲白團(ふの雪中に端午よ
雲(くも)ると作(つく)りて金盞(きんさん)の中(なか)に垂(たら)して小角(こづの)ふ

節をそげて社あてくれと合するわりと白圀と名つけ或は五色とまぜ〳〵人數花菖蒲のくさを似り鴻池園と名づけて端午に設ふる歳才雛祀ふるる
○付日日いろ〳〵れきぬよ乳文の脊とたて屏風に帳扉をとときそ恋元とやりわざする事と枕下といつゝ抱朴子と以書ふ端午よ赤豆飯を食ふ
○百草とたくらぶ
くれそふたそまきあり荊楚歳時記
○蘭湯をあふる
五月五日蘭をさくいて煮湯とあるべし
○菖の蓑
ふるいまの世の菖蒲の屋乃をこうるべし
○梟乃あそびそ
事文
○競渡
○龍車
○水馬競渡といふみなてほと俊名
五日に汨羅をしたうてなり競渡乃ふねを龍舟と事文
○龍舟
のふねに競渡の舟のうろくくやさ龍舟といつゝ文龍車
水馬ともいつゝ銭のふね舟と車といひ檝をうとふねを龍舟
車水ともいふ事文
○騎射
ふるこ事文
○左近乃真手書
○左近
のわくそつひ四日いたをのせをまもひ五日いたをのまそつひ六日いたをのまそつひ二日を除乃ほ手褐の席をひきて五月二日いたをのまそつひ六日を除乃ほ手褐の席を引おそ

放ようひとうの日といふて是を求
正日あれいそとひとうとよみ男又おもい左右をのうる場合てる
のうりる事あり考ふ ○下地（インゲ） 俗世情風俗より人事のかりそめ
虎の論材とハ異あり ○下地（インゲ）子午時ノ雨 竹二
乃論材よりそれ こゝろよくなり ○神水（スイ）論ずる所ハタゝル水ニ本草綱目
競馬（キヲヒムヘ） 五日六日くるまとひる東方より左右よつゝびてるく
らくちかく事あらちを中ひ勝負の本ゝしてうち負
を決 ○あやめおひそ 五日五日俗人種々とうりておひそのとしてゝ馬（イ）新ノ邪（ムシ）事
ハ花を事まよありと於放おそう松事事も種（アヤメ）の事とりよ
よ必五月五日よあるまもおうゝといふてもう図をよい端午に
種菜をおるふ ○藤ノ森祭 俗五日神事
さくぶんのおとりよものあり

今人祝五を崇
五天五と祝了 ○宇治祭 俗八日きんぐとも
時よありちう松と
よ ○室（ムロ）乃明神祭 俗十三日 ○西社祭 ハ
廿三日を云 ○有無日（アリナシノ） 廿五日貞観元村上天皇の清涼殿に忌ごもり給ふと
改事あり急用あるいわう事
もあるとうて此名あり ○賽勝講（サイシヤウカウ） 東大寺兵福寺
四ケの大ち社俗の事に警古のきおくあるとをゝひて薬師とを言務
五経を講涼殿にて傳ち尽云事松原つゞく事に清海の声といふ
よるあるそこの事ご年中行事お合 ○賑給（シンキウ） 貧いやしき民よ
よ五月のみのりとよめ尽これあり 粳塩（ウルチ）なととるよ

あり京中乃傳里小說を多て拗非遠使
うちなどりてくこゑをひく
廿八日 ○おごろぢし 仰は日 ○山田御田扇 ○芒種乃
節 五月 節之 ○夏至 五月中之 ○ちつき雨 ○梅の雨
徹雨仰 堅梁毛定 はのおと 五月の晦より 月二の全乃日より
徹夜とも由たな芽紹目よりあるうまさ黄番夜ともいつ
○虎が洞乃夜 仰廿八日 虎洗お盆傷セし 故うる事降とかくそこ
○祇園ちお雲洗 仰 廿日 ○半夏生 五月の中より十一日
仿るよ世俗よいは日つこるまき 月令は表
梁のおとふ舎といつる ○蟬乃初壽 月令の晦日あり

上卅四

○鶯 言と入 仰月令よ及春無色
○藻乃毛 ○藻とう活屋刈 ○むくろ花
花 ○百合 姫ゆり 俗名ゆり仰 ○さる皮ちお ○山ぶ陽茎 四ひらの
○忘草ちお花 萱草 仰 負姫之墓と ○未摘花 紅の花仰
○石菖 ○花菖蒲 ○金銀毛 ○葱 ○下野の花仰
花葉よ似て 黒し白もと
○菱菊 ○射菊 ○射毛

草は○薏苡實子は未いちこくさいちこと○天蓼は○蚊帳草は○かさぎこれ草之○芝は○苔は○早瓜は浅瓜也云り白瓜は干瓜○かうきは○南天の花は○ちつさ躑躅は○生胡桃○花ざくろは○榊乃花は○ひさし柳の花は○椿とよ花○ゑのきもとくさんの事也○白梅木梅也○杏子は○枇杷は○青山椒は○茗荷こと○ゆ

女○田芋○子苗とも○青田○田草とも○栗すく俗稗粗胡麻ホまくといへり五月ころうへ八月ころうるい○萩ふは○そゝまめひくはうそ十月ころうるい○螢○蚊柱蚊ゝ○水鳥の巣○かるの子鴨也云鴨のよし○蚊ぶよ○羽ぬけ鳥とも○鴛鴦○鴨小鴨舟鴨舳舟舟縄俗○魚藻おもに○鮎○鹿の子○勢狩○猪○照射火串さし

きれた夏懐云もしいふ夜の扨らきになぐとつよおよ火とよめて山中よりれい扇をたよ風をとんおいをとらてをてとるへさりおいをうぐひす(ウツラ)のまく○鶯乃巣(スガ)俗○小鯵(コアヂ)は○水鯨(バセ)は○鯨(エリ)は○ちつきやと○菖蒲帷子俗昔(トトヘ)○掌物俗○うらく

ひらは○はしらも日夏懐云ほうあるといつてらさるとて

なるふ

津へおろさかひれ津なれば夏よ

六月(ミなつき)凡往日(イニシヘ)多かる日(ヒ)営(ナヅ)夏目(ナツメ)林檎(リンゴ)且日(アシタ)朝日陽氷(ヒヨウ)多かつき氷(コホリ)ようくまて皆れ皆つきまるかとつよいきとみるつさとそうおい五日まる由へ名付(ナヅケ)ーを接の字まよくよくまて氷(コホリ)室(ムロ)の事ひあくるいあやまるとく○氷室(ムロ)氷室の事氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日と名ふ氷室云氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日と名ふ氷室と用ふ氷室云氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日津い処其式氷室(ムロ)氷(コホリ)室(ムロ)の事氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日おるのとよくよく保氏帯夏老(トシヨリ)氷室(ムロ)の事氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日山よう様をそまる津もおりく又氷室の事も夏この比乃世俗ハ氷餅(コホリモチ)を氷室(ムロ)の事氷室乃氷ハ四月一日より九月廿日まて取(トル)おるれる六月一日御飯(ゴハン)を供(ソナ)云朝日(アシタ)忌火(イミビ)といふ浄の火をおかよ津よ日今食(コンジキ)の法(ホフ)非津をよよりおくる

忌火(イミビ)乃

成へ一内膳司より女房を大床子(しやうじ)の ○一夜酒(ひとよさけ) こざけ あま酒 俗ニ
御前にて供する事あり 公事根源 ひとよさけと
いふ これハおさハ供する故く貞徳云醴(ヒトヨザケ)の字をかく おほさけとも
よめハあまさけも最之六月一日より七月晦日まで日毎にちると公事
根源にあり ○六月會 四日伝教大師の忌日なれハ延暦寺ニ
ておこなる勅使登山の儀式あり(公事)

○御體御卜(ごたいのみうら) 十日神祇官の官人主上の御体ニ法つくし
ゝわらん事をうらなひ奏する儀なり(公事)

○月次の祭 十一日十二月もおなしこれハ六月十二月二度諸
社へ御幣帛(てぐら)をたてまつらせたまふ事なり(公事)

○神今食(じんごじき) 同日これも年に二度之伊勢太神宮を勧請
し奉りて天子みつから神饌を供せさせ給ふと云々(公
事)

○解斎(げさい)の御粥(おかゆ) 十二日神今食の次の日の朝
の大床子にて甚盤一御をとる

供せ清く為ある女房る和布乃汁物と
ゝへ参り三口食て御箸を府くと(公事)

○祇園會 七日祇園より天延三年六月十四日助正と云者の家
を旅所となし東洞院へ法とあるへき異義によりて旅所を
かへたり七日此所ちしかれり秀吉公の時
いまの四条京極乃御旅所に遷座あり

○長刀ほこ ○函谷(かんこく)鉾 ○
鶏(にハとり)鉾(ほこ) 人形相子 孟嘗君ヶ故事之かん
古ぼこ こぶことゝのひ事を ○月ぼこ ○
菊水鉾 慈童(じどう)と云ハ非(ひ)之菊酒を人形ハ菊植え貴長房
夕顔によりて主の子言きにの彼菊酒のふう事あり

○放下(ほうか)鉾 むかしの人形あり ○母ぼこ 神功皇后を
彼乃千珠満珠(かんじゆまんじゆ)とそまうして三韓を討ち
さゝえたまふ ○岩戸山(いはと) 日本紀神代の巻乃あまてらす大神のみめつちい
ていまり まださわれざる附まつれる事あめの子

みことしといへる歯はよのつねのやうにおもしろきことありて日神岩
戸にこもりましゝ世のさまをながくきはめたるをかたどれる祢
かざく ○占出山（ウラデ） 神功皇后三韓をうちたまひし時に松浦川に出て
鮎つりたまへりといふことあり 日本紀にあり
あり ○孟宗山（マウザウ） 唐土二十四孝の孟宗が事にて笋堀（タカンナホリ）
していふたる山也 ○郭巨山（クワクキヨ） 是も唐土二十四孝
なる ○琴破山（コトワリ） 伯牙（ハクガ） 鍾子期（シヤウシキ） 伯牙が琴を破る事あり ○蟷螂山（カマキリ） 五車にむかふ古語にいふ
也 ○白樂天山（ハクラクテン） 或ハ伯牙が弦を断しといふ何
の語といふ ○太子山（タイシ） 聖徳太子天王寺の義 楽天は林禅師秦望山松乃上にありしをみて鵲巣和尚と
なる故に 法興寺の木に設書の像と鵲巣といへる事あり 鵲巣にとまりて坐禅せしに 法照莫作衆善奉行
今の六角堂に ○木賊刈山（トクサカリ） といふ ○木賊刈山 これは刈りて東山に木の芽をとるを
え高く見事にて 山ハ木賊刈山 秋の夜の月にめでゝ古歌の意に

○芦刈山（アシカリ） 大和物語に見えてわびぬればとよめる歌をうつしたる ○花
盗人山 いづくなる人にもあれ花ぬすびとといへる事あり 一の谷に
○山伏山 生不動祥（スヾヒラロセウ） あるひハ梶原がえびらに梅をさしたる花をも
○十四日 七日に祇園の本社へ出御ありて神楽をそなふ ○橋弁慶山 義経
○天神山 二 ○保昌山（コレ） 二
しるし ○鯉山（コイ） 龍門乃三級に鯉のぼる躰なり ○蟷螂山（アシ） 平家物語に見ゆ 平家物語にみえ 筒井ノ浄名
朱法師とて銀に書たる絵あり 物語にありしをうつせる ○黒主（クロ）（ヌシ） 古今序に
出るとて謠る山乃名あり
花の陰にやすめるがごとしと ○役行者山（エンノギヤウジヤヤマ） 大峯役の行者 角居（キ） 神をあらはす 小
いふる心を歌によみたるをいふ ちしを さぐめし

たるさ
はるより ○ 鈴鹿山（スズカ）生ずる神もでられてるやしと子見とうたふ
をほよそくさはとつて或説よ鈴山ありしをも井
とも云くのるて ○ 鷹山（タカ）鳥物のていく枯おひる人形
あれい枯おひやまともつて ○ 釈書（シャクショ）
山 ○ 毎月こ七日のあかこたうこおるしむりい枯ふ井より
しい氏よの風情をはくまる長などつらいさて由えさり今いを我もる
おぐつるしをいう天王氏注下とい子おいの公ういと
どこいい作り物をして神恵といさめまる公るて（世俗四条）今い
雑式小金人の盛成作るさしい供をおととるる又如こむこの
ちほい御まりの霊（タマ）をはくまりて天王氏武塔天神とを疫病の神えておりえこ井
井のみうしい稲田姫こそくりさい女とやをいま一不
八大王まるあり巣田口多ろところよる廿一

○ 津島祭 仙十四日五日 毎月ろうにて灰抛灯
十四日海を記はさきのをえととて ○ 山王祭 仙十五日 大田乃薗文明年中に江戸に山王権現を勧請こそく
祭日日 ○ 江戸れ山王まつり祭 仙十五日 ○ 相国寺（しょうこくじ）せんぐう 仙十七日 楼門ニテ行 ○ 祇園（ぎおん）御
祭 十五日 都はうち東征をまつる 松尻と云鉄鉾（かなぼこ）を吹ス ○ 祇園会（ぎおんえ）御
八坂乃里とう東征のうちもりよの事ふ（公羊） ○ 赤宮会（カジヤウヱ）日 ○ かんこう 仙十六日
通宝と仕里ハ務とう子ふ ○ 残 同世俗同着云此事更よ本説
ありハーよいき居くのうさ地とうの残そもとめ之ハ来一神六ふ

まつると ○伊勢の祭礼 俗十六七日也京も ○博多祭 俗
伝へり まつるとある也
十六七日 ○志度ち祭(シドジ) は十七日 陰暦 ○座頭の涼之 俗十九日
俗にお
○富士詣(ニウテ) は一日より廿日までの間 市富士こもりとい(ふ)(四五月) ○清手洗詣(ミタラシニウテ) 俗廿日
より昔
まで ○鞍馬(クラマ)の竹切 は廿日 ○愛宕千日詣 は廿四日
○橋立祭(ノ) は廿五日 丹後之 ○天満(テンマ)天神御祓(ノヲハラヘ) は廿五日也天満
と流して祓 祭也住吉の
祓と云 ○大坂座摩(ザマ)祭 廿二日 ○賀茂みな月祓
俗三
十日 ○住吉の祓(ヲハラヘ) は ○唐崎まいり は… をまつる
なり賀茂祭

手洗いむかしより祓の所住吉は神代にいさなぎ之日向の
小戸あはきがはらにて祓し給ひしをはらひ給ひし 神なれば唐崎は
舟泊なりあのひとうちきに祓とぞ本伝へ源氏に女君に五節
の唐崎にて祓あり今の祭の事法にて今もみな
大きなるまで ○節折(ヨヲリ) 廿日廿まで主上の御丈の寸法
伝ふるなし をとりてその竹をおりあてて節
よおりといふ之は節おりの命婦竹をもてはかりて御身の寸法
をとり主上にまゐらせて御祓を勤る事なり(公事)
○大祓(ヲホバラヘ) 晦日法祓川にて夜にかく夕かく祓草などの祓
おこなふ 又むかしは百官をしく朱雀門にて生そ
なくとて伝とこ集ふ神をなく和むる也まてそこの人
ちらへもおこなふものより麻の葉をきりてぬさとしも、
もろ人出て麻を
なぐさといへり ○形代(カタシロ) 法祓ある人形をつくりて身の災
紙をなでて川にながす事あり

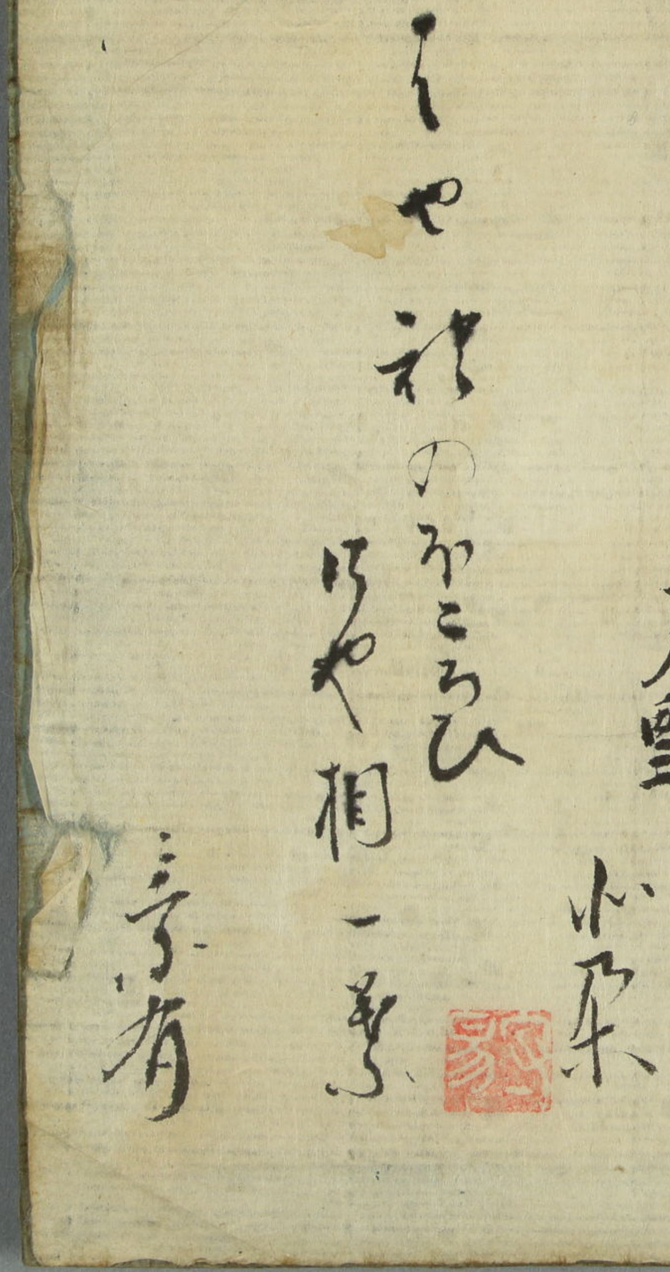
これとえこ ○茅輪（チノワ） 疫病をやらんとき茅民より来よねと、のるをきゝ茅民より来てる強こと云て茅の輪をくゞいにしへ俗のならんと、のゝくゝふるより今も疫よ茅の輪を誦るなり ○夏神楽（ナツカグラ） ○川社 神中おゝよあるくゝ夏神楽のはじめともいふ ○小蠅（サバヘ）を神 夏出るあるくゝ人うとをそするとよめりさるなき事 五日本紀二 ○忌火（ヒレヴノ）祭 此日ト部氏の人火をきりて炎夏の四乃角よて祭事あるよ火災とこせんとたゝとるゝ云事 ○乃響（アヘノ）祭 は日四角四境のまつりにもト部氏人姫の四方のはらて忌（キ）慎乃他方より来るとを強ふるとを強ふるとゝ四角四境の祭ともいふ（公事）

○施米（セイマイ） 東山西山小山などの山ちかきさる紀伝所をうけ米をとおはやけよりをたまはるとこゝろ（公事） ○雷鳴（カミナリ）の陣（ジン） 雷の事ありて帝と方渡（ヒムカ）しなる事ことのせうる事にて公事根源も六月の節（セツ）ゝ ○温風（ウンプウ） 月令 ○腐草（フサウ）螢となる日令 ○溽暑（ジョクショ） ○小暑（セウショ）節 六月の節ゝ ○大暑 ○雁（カリ）初（ハツ）来 ○夕立 月令ニ大雨ゆよりとよりて仏 ○天貺（テンキヤウ）節 六日宋の祥符四年ホシことゆりて六月六日を天貺節とせり書言故事 ○三伏（サンフク） 夏至の後第三の庚の日を初伏といひ第四

の庚と中伏といひ立秋の後初の庚を未伏といふこれを三伏と
いふこゝ夏い火と秋い金と交るよって一伝生ずても火盛るの時節る
れい金気伏くるゐ心よ伏といふとそ（書云故書）秦の時よい
伏祠と祀りて盛災（サイ）を禳（ハラ）ひくに伏日にあつまり津あり好漢の
時は伏日より万石（コク）切とそて酒を飲ひ博奕（バクエキ）をうちて
都（スベ）て涼（スズ）しくうち楽めんための設（マウ）け山谷詩にも脚（アシ）もおるし
たらひ○涼（スズ）風（カゼ）炎暑（エンショ）を涼（スズ）しきとゝいふ又涼（スズ）納涼（ノウリヤウ）又涼（スズ）
あるり○涼（スズ）月涼（スズ）しき夏六月よりく涼風（スズカゼ）薫（カヲル）風（カゼ）
とそ○風薫（カヲル）南薫（ナンクン）自南来と古文も集（アツ）まいつり○雲峯（ウンホウ）

夏雲多奇峯（スベテクモオホクキノミネ）と陶淵明（タウエンメイ）の詩（シ）にも雲（クモ）の奇（キ）なるき峯（ミネ）
ゐ多雲（クモオホク）の奇（キ）にるき峯（ミネ）のやうなるといふなり○清水（シミヅ）
○おき地酒（ヂザケ）俗（ゾク）○井（イ）水（ミヅ）を冷（ヒヤ）しくそなふ○醤油（シヤウユ）
○ちしゃ井（イ）六月（ロクガツ）より井（イ）をさらへ津（ツ）あり○搗（ツ）つく○ひく
○汗拭（アセフキ）俗（ゾク）○簟（タカムシロ）竹奴（チクヌ）竹奴人（チクヌビト）脚（アシ）ゐ
俗（ゾク）説（セツ）よしぶして予も發句（ホック）をいひ津（ツ）しが後（ノチ）より識人
を要（エウ）ありくおの詞（コトバ）なるよしきを面（オモテ）ゐ赤（アカ）らめ判（ハン）の詞（コトバ）よそ公（オホヤケ）と
そろ〳〵といひみところ〳〵ゐ俗（ゾク）説（セツ）よしぶして予も發句（ホック）をいひ津（ツ）しが後（ノチ）より識人
先（マヅ）此（コヽ）悔（クヤ）るよ○扇（アフギ）俗（ゾク）○団扇（ウチハ）○土用干（ドヨウボシ）俗（ゾク）虫払（ムシバラ）ひ○
切茶（ギリチヤ）俗（ゾク）○川狩（カハガリ）は○梅むき（ウメボシ）は○麦稈（ムギワラ）は梅つけは

○子樜は○楊梅は○李は○林檎は○百日紅は○指
子やすとるてうこかゝるてうこ川原指子仇
諸う指子は芰なるしこは常夏又名石竹
○蓮荷葉仇なきの実は夏也云蓮
ハ花よ実をもしてわる也よきそのこハ夏之
なきのこゝろ六秋之なきの色やうき紅蓮白蓮○澤瀉仇○河
骨は○菱の花は実ハ秋之○蒲乃穂仇○海松うききうみるぶさ
うきくさ○蘭を刈は植子ハ青云く○鉄線花は○眼皮仇かず
古仇は記ひ古今○凌霄花は○ぎぼうしは○きりん草は○は
杜名
王う瓜の花は○射干は一説おきは○紫蘇は○青鬼灯は

○麻桜麻花の桜よ似ることなり蒔きの糸からむし仇青苧は
青苧の蒔は麻を刈ハ夏之二度刈ハ秋なり実を秋之
○香薷散香薷と斗そ○蒜乃根○瓜青瓜からうり仇玉瓜瓜は胡瓜は姫瓜は
多瓜はおこうは○夕顔ひさごに似仇よ干瓢むくは○昼顔の花仇○小
角豆は○ひとりひぐらしは雲雀をわるにてとる事く○蟬うつせみせみのぬけから仇
セミノ名は蝉のならなゐ○夏虫夢をとこ名とよむハ蛾之火とり虫と云もおなじ事也見ずせざなとも用り
○蠅○秋乃蝉来ぬ秋秋すみ川

増續山井四季之詞上之終